

二ひきのカエル

「ううん、ここはどこ。」

井戸いどに落ちたピョン太は、小さな水たまりの中でようやく目をさましました。井戸の上まではかなりの高さがあります。まっすぐにのびたかべはつるつるしていて、とても登ることはできそうにありません。おぼろ月がちょうど上にあり、井戸の底をわずかにてらしていました。

「おおい、だれか助けてえ。ぼくはここにいるよう、おおい、おおい。」
大きな声で何度もさげんでみましたが、声は外とどに届いていないようです。

「うるさいぞ、そんなにさげんでも、だれにも聞こえないぞ。」

井戸の横にある小さな穴あなから声がありました。よく見るとおじいさんがエルです。

「あなたはだれですか、ここから出られますか。」

ピョン太は一人ひとりでないことがわかり、ほっとしてたずねました。



「わしか、わしはこの井戸に落ちてもう何年になるかな、名前も忘れてしまったわい。それとな、ここから出ることはできないな。わしも始めのころに何度も試^{ため}してみたがだめだった。」

「そんなあ、ここからもう出られないなんて……。」

おじいさんがエルにそう言われたピョン太は、一人で泣き続け、いつの間にかねむってしまいました。

次の日になりました。お日さまの光が入り、井戸の底も少し明るくなりました。ピョン太は井戸のかべをじっと見つめていました。

「よおし、登ってみせるぞ。」

ピョン太は、わずかなかべのくぼみに手足をかけて登りはじめました。でもすぐにすべって落ちてしまいます。何回やってもだめでした。

「無理じゃ、無理じゃ、このかべはわしらには登ることはできないな。そんな

むだな努力をするよりもじっとねているほうがましじゃよ。」

おじいさんがエルは言いました。ピョン太は体についたすりきずの痛^{いた}みに、ためいきをつきながら聞きました。

「おじいさんはもう外に出るのをあきらめているのですか。」

「そうじゃなあ、長い間ここにいると、ここもそんなに悪い所じゃなくなるで。」





「こんなだれもない井戸の底がですか。」

「そうじゃよ、えさもとときどき落ちてくるし、何よりへびや鳥におそわれることがないからなあ。さびしいことをがまんするだけで、のんびりできる所じゃよ。」

「そんなあ、ここでずっと生きていくなんて……。」

おじいさんがエルはまたねてしまいました。

それから何日もすぎました。梅雨つゆの季節になったようで、雨の日がつづきました。井戸の水も少しずつ増ふえてきました。

「ああ、雨の日は、みんなは田んぼで音楽会をしているだろうな。」

「今日は水泳大会をしているかな。それともピクニックかな。」

ピョン太は、井戸の外の友達ともたちのことや楽しい集まりのことを毎日毎日考えていました。おじいさんがエルはあまり話をすることもなく、いつもねているようでした。

セミの声こゑが聞こえてくるころになりました。暑い夏なつになったようです。井戸の上をお日さまが何度もとおりすぎていきました。

このころになると、ピョン太もおじいさんガエルと一緒にじっとしていることが多くなりました。ある日のことです。遠くから何人かの人間の声が聞こえてきました。

「暑い、暑い、こう暑くてはたまらない。」

「おや、こんなところに井戸があるぞ。」

「冷たい水が飲めそうだ。よし、このおけを落として水をくもう。」

ガラガラ、バシャーン。

「よおし、たっぷり水が入ったみたいだぞ。」

ガラガラ、ガラガラ、おけが井戸のふちまで上がってきました。

「うわっ、カエルが入っているぞ。」

びっくりした人間は、おどろいておけを地面に落としました。

中から出てきたのは、二ひきのカエルでした。カエルたちは森の方にはねていきました。

